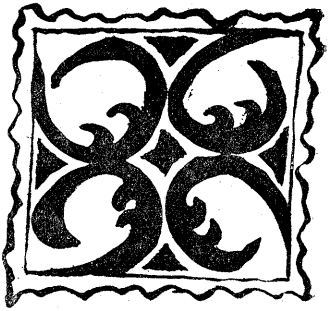

紙芝居の教育とその演出

坂本越郎

私のお話致しますことは、紙芝居を幼稚園などで保育の教材として使う場合の原理と演出方法です。

紙芝居と一口に申しますけれど、紙芝居が視聴覚教育の教材として使われていることは、現在まだ少ないのではないかと思います。紙芝居を教育的意味で使うのではなく、ただ楽しみのために使っているのが普通でしょう。もっと保育教材として使っていただきたいと思います。

それではどうすればよいか。まず紙芝居は視聴覚教材としてどういう意味があるかをお話しましょう。ここで問題になるのは Communication ということです。この意味は、通信とか伝達の意味です。例えば犬がほえるという場合、他の犬達にこわいものが来たことを知らせる時吠える。一犬ほえて万犬ほえるということになる。犬はこうして伝達する。人間は言葉という抽象物で伝達できる。これは人間だけがもった機能です。例えば犬と子供が散歩に行き暑いので子供が川で泳ぐ。急に深い所へ入って子供はおぼれそうになる。するとりこうな犬なら主人のためにほえるだけでしょう。この場合人間の子供がそれをみたなら、誰かに危険を知らせるために走り出す。そして「川で子供が溺れかけているよ」ということを抽象して誰かに言葉で伝え助けを求めることができる。ここに Communication が成り立つ。AからBに言葉で伝えることです。

人間の文化はこうして言葉を使えることによって向上してきました。つまり Communication をもったということにより、人間の文化が動物よりも発達したのです。さらに、これがラジオとか、映画となる魔力的な大きな影響を生むようになります。現代のマス・コミニケーションというのがこれである。マス・コミとは大衆に伝達するということです。マス・コミの原理は送り手はごく少数の人であるが受け手は多くの人であるということです。紙芝居なども僅かながら、このマス・コミの性質をもっています。しかしこれには映画・ラジオなどのように大勢の聴取者の獲得はできない。しかし、紙芝居はどこへでも持ち運び演出することができる。これをA地か

らB地へ場所の移動をすれば、ある程度の大衆をつかむことができます。先日の選挙の場合にも紙芝居がつかわれました。被選挙者の経歴を紙芝居にして宣伝効果をあげたのです。

そこで、Communication はある意味で教育というものと一致する。教育ではどんなことを生徒に教えるかだけでなく、どうして生徒に伝達するかを考えることが大切である。今日の教育では学習方法、教育方法を考えることが大切に考えられます。

Communication のもとの意味には、共にわかつ、参加するという意味があります。コンモン「共通」という意味です。Aの伝えようとする内容、例えば教育内容をBに伝えるということより、AとBが共通の内容をもつということが Communication の大切なところなのです。

デモクラシーの原理は、世論を重んじること、つまり一緒に住んでいる者同志が協力するということを重要な原理とします。この協力ということはお互に共通の利益、共通の思想をもって解決することです。デモクラシーを発達させていくには、Communication が大切なわけで、今日視聴覚教育が大切にされているのはこういうところに根拠があるのです。わかち合うということは除け者をつくらないということです。教育における Communication は、仲間が共通のことに参加し、一人も除け者がなく、お互いに新しいものを学び合うということによって定義ずけられます。

ところで Communication は、言葉だけの仕事ではない。言葉は重要ではあるが、それのみに限定はできません。我々は身振りであるとか表情によっても、相手にことを伝えることができます。昔であれば剣の修業なども、言葉を用いずに師匠から弟子に伝授します。身振り、挙動など、依心伝心によって Communication が成り立つ場合もあります。また逆に Communication が成り立たない場合は、相手に対してこちらの言葉のもつ概念が広すぎたり狭すぎたりし、通じない場合です。相手に通じさせるには、相手の経験の範囲を、Communicat しようとするものが理解し、心得ていることがどうしても必要です。

これは幼児教育によくある問題で、先生のいうことが子供によくわからない場合がある。経験のないもの、少ないものは Communicat することはむずかしい。それは概念というものが、事柄の抽象化したものであるためで、この抽象の押しつけが今まで行われてきたのです。しかし概念は体験の基礎に裏づけられ、具体化されると、相手に理解され易くなる。ここに視聴覚教育の意味があります。

われわれは、さまざまの教材を通して現実をみせたり、聞かせたりして、言葉の概念へと導いていきます。ここに具体と抽象が交互に行われるのであります。視聴覚教育は言葉というものを使って一般化し、こちらの内容が相手に伝えられます。言葉が具わってはじめて相手の思考作用を働かせ具体を抽象化することができます。

これは幼児教育においてよく体験していることと思います。例えば（紙芝居の一画面を示して）「これはひよこの絵ですね」といって

しまったのでは、こちらから概念づけを与えてしまっていますが、相手から何だという事をつかませる必要があります。我々の体験の中には必ず言葉がしみ込んでいます。しかし言葉のみで教えることは抽象すぎるからよくわかりません。それを一つの絵を示すことにより具体から抽象へもっていくことができのです。

Communication には、(イ)形式的伝達と(ロ)非形式的伝達があります。(イ)は道具を使うもの。(ロ)は言葉や絵だけでなく感情や印象等によって伝達する、例えば絵をみる場合、芸術的感動によってはじめて芸術作品を解釈し鑑賞するということができます。殊に幼児教育のうちには情緒的教育をやることが必要です。これがうまくいかないと功利的になったり感情が偏頗になったりします。

紙芝居においてもこれを土台とし、この中に Communication を成立たせます。Communication を(イ)と(ロ)に分けたが幼児教育においては未分化の時代であるので両方を混ぜて行うことがよいと思います。幼児は大人と違って情緒的直感の鋭さをもっているので、これを回路とし、子供と先生の間に教育の過程の回路を成立たせます。紙芝居は、こう回路をうまくつくるものです。

紙芝居の歴史

次に紙芝居の歴史をすこしお話しましょう。幻灯は享和元年にオランダエキマン鏡という名で江戸に見世物として出ました。当時はマジックランターン（幻灯）といわれオランダ渡りのものでした。ところが、紙芝居は日本独特のものであり、昔の絵巻物、おとぎ草子、子供の絵話から進歩したものといえましょう。絵巻物を一区切ずつ切って重ねたものが紙芝居の形式の初めともいわれています。

紙芝居は歴史的には二つの形式があります。

一つは立絵式紙芝居で一種の人形芝居でした。紙人形を切抜いて箸にはりつけ絵舞台の前で、人形を立てて動かすのです。人形は箸でささえられているから裏側も利用できます。そして舞台からは出し入れも自由です。

明治の終り頃から出て来たのがもう一つの、いわゆる平絵式紙芝居というものです。前者は舞台の絵はそのままにしておいて、人形を動かしました。しかし後者は舞台の絵を何枚も動かすようにいたしました。人形は絵の中には書き込まれています。

平絵式紙芝居は芝居の舞台面の制約から離れることが有利です。絵を自由にかくことから、今日の紙芝居の劇形式を成立たせたのです。

これは今日では街頭紙芝居と教育紙芝居とに分かれています。街頭紙芝居はご存知のように商売としてやっており、あめ屋の一種です。子供達にとってはあめさえ買えばお客さんになれるのです。

食品の方では心配もあるが、東京都では街頭紙芝居連盟を作って、教育的にも考慮されています。兎角それが街頭の子供達の娯楽であったことは忘れることはできません。唯一の今でも子供らの社会教育の対象であり、これに目をつむることはできないのです。

街頭紙芝居は肉筆で、絵をかき、その上にニスをぬってはげない

ようにし、貸元の棚に入れておいて順々に廻わして使用する形式になっています。

教育紙芝居は印刷されて、学校や幼稚園でつかうものです。いろいろの題材で子供の教育課程に応じる必要から、印刷されています。教育紙芝居は、印刷紙芝居ともいわれているものです。

昭和十二年に日本紙芝居連盟が発足し、それ以来教育のための印刷紙芝居として広く使われるようになりました。昔の紙芝居の枚数は二十枚〜三十枚でしたが、幼児のみる時間の問題、回数の問題などによって一組が十枚〜十六枚となり、今では十二枚が非常に多くなっています。

街頭紙芝居には連続物がありますが、教育紙芝居では、一種に一つの主題でまとまっているのが特色です。また写真によるものも少しはありますが遠近がうまく出ないようです。紙芝居は自作することもできます。幼稚園では大いにつくっていただきたいし、子供達にもつくらせることに教育的な意味があります。紙の上に絵ばかりではなく、色紙や、布切れや、はり紙ではって美しくつくることができます。

教育紙芝居で市販されるものは、昨年度は一八九種という非常に少ない数でした。売行きが悪いので製作は月に一、二本程度でしょう。

紙芝居の構成原理について

紙芝居はきわめて簡単なものから成り立っています。

すなわち、数枚の紙に描かれた絵と、物語と、演出から成り立っています。絵がなければ紙芝居は成立ちません。絵本等には紙上芝居と称して、ふき出しのついたのがあるが、演出のない紙芝居は本当の紙芝居とはいえません。

構成要因としては、絵、演出、物語の三つがなければ、紙芝居は成り立たないのです。

幼児は絵をみるというよりも、絵を読むものです。自分の経験の中にあるものが絵に出てくることを喜びます。

絵本の場合には、よく絵をみせ、子供が読み取るものを列挙させます。子供にはこれが愉快なのです。

たとえば、幼児は未分化である為に、女の人でちょっと大人のようにかいてあれば、すべてお母さんに見えるのです。

絵をみてそこにかいてある状態を空想的に描写するのが次の段階です。次には絵の中の状態から判断して理解します。この段階では、物語を絵で推量し、解釈します。就学前の子供に多い〝なぜ〟という言葉も多くなります。なるべく子ども自身に解釈させる必要があります。

しかしこれは紙芝居においてはできないことで、ここに絵本と紙芝居との違いがあります。

絵の原理

紙芝居の絵は性質上第一には、絵の構成が単純で客観的にわかるということ、バックを簡単にし、物語との関係を、直感的に感受す

る、見分けることができるようにすることが大切です。

第二には、場面や、見振り等絵の構成を変化に富ませることが必要です。同じ位置に同一人物が語って動かないのでは好ましくありません。なるべく場所も変り、事件も変り、人物も変るほうがよいのです。

第三には、紙芝居の約束として、絵は左へ抜かれ、左へ移動することになります。そこで、常に右の部分が先に見えて来るのですから、その点に重きをおいて絵の構成を考えることが大切です。

○視点の移動による連続

絵を急に抜くと目の動きもそれに伴う為、運動感を与えます。これを利用して次の絵へ移らせます。

○物象による連続

物が連続して次の絵への移動をはかります。例 汽車

○類似の色彩による連続

前の絵、次の絵の空の色とか壁の色の類似をはかります。

○色や形の伸縮による連続

汽車の大小によって遠方から近づいてくる感をもたらします。また半分抜いて二つの場面があるようにみせます等。

○伏線的連続

物語の内容により色彩の対比、バックまたは主要人物の変化等、起伏をつけながら目的地に向って進んでいくのが紙芝居の常道です。

第四に、物語は、絵を標準とすべきです。絵にかいてないことまで解説を入れないようにします。ごく単純にということが重要です。しかし単純といっても平板であってはなりません。一枚抜くごとに、期待を満足させるように物語をつくらなければなりません。

一枚の場面の提出時間は一分以内であること、また解説の文字数は二百字以内がよく、多くても三百字までです。

演出の原理

演出は、劇形式は必要ですが、活弁口調である必要はありません。なるべく自然な口調で、出演人物のセリフはその人物に成り切ってすることが必要です。解説の長いのは邪魔です。子供の心をとらえながら進めて行くのに、間は重要な役割をもちます。例えば「父帰る」(菊池寛)の父の帰ってくる場面、お父さんがしおしおと出て行った後、次郎は追いかけたくてしかたがない。兄も新聞を読んではいるが心中複雑です。ここに間の呼吸が必要となるのです。

絵と文章との協調が必要ではありますが、一々忠実すぎる必要はありません。門から子供が歩いて来て石につまずいてころぶまでを一枚ずつ絵に表わしていたのでは大変です。

物語の形式には、序、展開、葛藤、終結があります。「序」では人物、場所の紹介、事件の発端の表現をし、「展開」では劇の進行「葛藤」では、事件を出し、山とします(五枚〜八枚必要)。「終結」は、一〜二枚を使用して大団円をまとまりをつけます。

次に演出でありますが、話術が非常に重要視されるのです。肉声

ですのが本体で、テープレコーダーなどでは失敗をします。

演出者は紙芝居の後にかくされて、こわいろを使ってするのが普通であります。音声はあまり誇張せず、象徴的な声を出します。物語も絵も象徴的でかつ単純でありますから、話術も調和させ、象徴の世界から現実に近づきます。これは能の芸術に近いものです。

演出は絵の解釈であるが、演出者の個性を出し過ぎてはいけません。絵に勝っても劣ってもいけません。絵と話術の綜合によってうまさが出てくるのです。

画面の内容によって「抜き方」つまり移動の速度を適当に変化させる必要があります。

画面の裏に指図があるから、それにしたがいます。「急に抜く」事は激動感、運動感をもたせ、「ゆっくり抜く」場合には、静かな感情があらわされ、悲しみや、夜の静かな場面などにつかわれます。

トリックの原理

絵の描き方にも関係しますが、さし込み等をして絵の中のある部分を動かします。最近ではこれを使っていません。

効果として、舞台のまわりにいろいろのものがない方がよいでしょう。舞台の卓には卓布をかけ、演出者の足をみせないこと、演出者は姿をみせないことが大切です。

幼稚園の場合には観る態度を導入する為に、舞台の傍に先生が姿をみせる場合がありますが、落ちついてみせるようになったら、後にかくれた方がよいのです。

舞台は演出者の抜く手が目ざわりにならないように、袖のあるものがよいし、幕のあるものをつかって舞台の形式を整えると一そうよいと思います。

刺激的な言葉や動作はさけます。回りのものを使ってまで演出する必要はありません。絵の中の人物を浮き出すためには、演出上の発声法を研究することや、歌も上手にうたえるよう練習しなければなりません。

以上、紙芝居の絵、物語、演出上の注意を申し上げました。

次に紙芝居の実演をお目にかけます。

一、どなたのぼうし（はり紙紙芝居）—お茶の水幼稚園自作
二、かえるの王子さま（情操教育用）—教育画劇社製作
三、モンタくんとうさちゃん（保健衛生用）—教育画劇社製作

まず紙芝居の演出には、作品をよく読みとり、それを声に表現致します。これは「話し方」「抜き方」の二つになりますから、「話し方」をはっきり、親しみ易く生きた言葉ですることです。「抜き方」は、円滑に静かに抜くことで、裏面の注意書きをよく理解して、作品の山へ子供たちを引きつけていくようにします。

声のよくようで演出する場合と声色で演出する場合がありますから、よくおきき下さい。（筆者はお茶の水大教授）〔未完〕